

中国における新しい女性性をめぐる研究動向と展望

－少女から成人への移行に伴うジェンダー規範の変化という視点－

馮 可欣

1. 問題の所在

本研究は「新しい女性性」の理想に着目し、理論枠組みを提供した欧米の既存研究、および中国の先行研究をレビューする。既存研究の概観を通して、中国の若年エリート女性をめぐる新しい女性性の理想を検討する際に、少女から成人への移行に伴う女性性規範の変化という新たな視点を提起し、今後の研究方向を展望する。

近年、エリート女性に提示された女性性の理想は一種の「バージョンアップ」を示している。欧米をモデルとした近代社会においては、女性は公私領域の役割分業に基づく家族の再生産の役割を担わされてきた。同時に、男性主導の異性愛関係において、性的魅力¹という女性性の規範が支配力を有する（江原 2021）。これらの伝統的な女性性に対して、2010年代に入ると、女性の大量就労、フェミニズム的な感性の浸透、美容・消費文化の興隆などを背景に、新しい世代の女性はより複雑な女性性の理想に直面している。その象徴としてよく言及されるのが、Facebookの元COOであるサンドバーグの著書『Lean In』（Sandberg 2013）である。この本においては、キャリア・美しい外見・家庭生活の全てを手に入れたエリート女性が一種の理想として描かれており、世界中に大きな影響力を持っている。こうしたキャリア的な野心を持ち、性的客体になるのではなく主体的に自身の魅力を研鑽・呈示し、母性を同時に体現するという期待は、さまざまな流派のフェミニズム研究において異なる角度から論じられているが、エリート女性を取り巻く女性性の理想の特徴として共通して繰り返して言及されている²。本稿では、それらの異なる流派の研究を総合的に検討したBudgeon（2011=2020）に依拠し、女性性の新たな変化を「新しい女性性」を呼ぶ。

こうした新しい女性性の理想のもとで、欧米においては、美しくて学業にも優れた「成功した女の子」（Ringrose 2007; McRobbie 2009）から始まり、キャリア蓄積と身体のセルフケアに時間と労力を費やすことで出産は将来的な目標と後回しにする青年女性の段階を経て（Rottenberg 2018=2025）、最終的にはキャリア・美しい外見・家庭生活のすべてを手にしたエリート女性へと成長する人生ルートが理想とされている（McRobbie 2020=2022）。

新しい女性性に関する学術的な検討は、英語圏を中心に蓄積されてきたが、こうした現象は欧米にとどまらず、今日の中国においてもある程度共通して見られている。毛沢東時代（1949-1976）において、中国のジェンダー秩序の特徴は、女性が男性の基準に合わせることで達成された脱ジェンダー化、すなわち女性の男性化として指摘された（呉 2009）。伝統的な女性性を

要請するケアの役割は家庭内に一部保留されていたが、夫婦関係は私的領域における親密性ではなく、革命の参加と社会建設の一単位としてみなされるため、公式上は隠され (Ji et al. 2017: 766-7)、性的魅力の表出も禁止されていた (黄盈盈 2020)。1978 年の改革開放政策を契機に、中国では市場経済が大きく発展し、短期間のうちに欧米的価値観と接続するような近代化を経験した。毛沢東時代における女性の労働参加と社会進出は一種の文化的遺産として影響力を持っている一方で、1990 年代以降、再生産の役割と性的魅力という伝統的な女性性は再び要請されるようになり、「再女性化」というジェンダー秩序の転向が生じていた (王政 1997; 呉 2009)。こうしたジェンダー秩序の変化に伴い、集団としての女性の解放よりも女性個人の選択と競争を唱える新自由主義が浸透し、女性間の格差が拡大している (陳蕊 2025)。低所得層の女性や農村出身の女性はずっと不可視化されつつある一方で、一部の比較的裕福な都市高学歴女性は特権的地位に上昇するようになっている (佟 2010)。それらのエリート女性³は、新自由主義的な個人化と消費文化の隆興、国が提示する男女平等のイデオロギーの遺産、伝統的な女性性の復権が入り混じる様態のもとで (黄燕華 2024: 206-7)、欧米から輸入されたフェミニズムにも大きく影響され、女性性に関する最新の理想を提示している。

具体的に、2010 年代以降、中国ではフェミニズム・ブームとも呼べる状況が生じており、高学歴の若年女性はそれに影響されて欧米発の新しい女性性の理想と類似する理想を提示するようになっている。SNS における MeToo 運動の広がりや相まって、欧米フェミニズム研究の翻訳書や解説書が次々と出版されたという背景のもとで、高学歴の若年女性はフェミニズム的な感性をある程度共有している (Peng 2020)。彼女たちは、『Lean In』(Sandberg 2013) に影響されて野心をもち、「仕事第一の倫理 (work-first ethic)」を抱えている (Tan & Wang 2024: 14)。また、都市部で生活し、経済的に独立した彼女たちには、消費による外見の磨き上げをエンパワーメントや主体性の表現とみなすポストフェミニズム的な傾向も見られる (Huang & Liu 2022; Wu & Dong 2019)。既存の研究は、欧米のフェミニズム研究が提供する理論枠組みを借りて、異なる角度から中国の若年エリート女性をめぐるジェンダー秩序の新しい変化を捉えているが、共通する知見として、新自由主義的な個人化のもとで、消費文化と経済的成功に収束されるような個人の自由と権力が求められるという感性が指摘された (黄燕華 2024; Peng 2020; Wu & Dong 2019)。

一方、欧米研究の知見は、中国のエリート女性にはそのまま当てはまらない部分もある。中国の若年エリート女性は以下のように独自性を示している。第一に、中国では、少女期において、学校管理のもとでは美しさの追求や恋愛関係は勉学の妨げとして抑圧される傾向にある。しかし、就労や結婚に直面する 20~30 代になると、社会から再び魅力的な外見と異性愛関係が強く求められるようになる。それを象徴的に示すのは、中国の大学入試が終わった 7、8 月頃にマスメディアで常に話題になる「美容整形ブーム」⁴と、若い女性が直面する「結婚の催促 (催婚)」⁵である。このように、中国の女性は一見して欧米の女性と同じくキャリア・美しい外見・家庭生活の並立が求められているが、それに至るまでのプロセス、すなわち成長過程における女性性の規範には、急激な変化がみられる。第二に、小さい頃からキャリア志向を身につけ、恋愛に関する統制を受けたエリート女性が仕事と家庭責任の間でさまよい、結婚や出産を回避しようとする「恐婚恐育」の現象が、社会的に注目を集めている⁶。欧米の若年女性も、20 代

の時期を家庭よりもキャリアに費やすべきだと考えると指摘されたが、彼女たちの結婚・出産拒否は自らの現在の人的資本を増大させるための自己管理・投資する志向性として解釈された (Rottenberg 2018=2025: 121)。「一旦職業的な地歩を固めてしまえば、その後に夫や子どもに心を注ぐ時間がたっぷりあると想定」し、すべてをもつことを最終的な理想としている (Rottenberg 2018=2025: 118)。このように、中国における「恐婚恐育」の現象が象徴するように、キャリアと母性の両立を前提にする欧米の規範とは異なり、中国の若年エリート女性は、家庭での役割を実現すべき理想として単純に肯定しているわけではない。

すなわち、欧米社会に根ざし、少女期から成人期までに一定の連続性を保つ新しい女性性に関する理論の枠組みと比較すると、中国における新しい女性性の理想は、より変化的で、また内的緊張関係を有しているともいえる。一方で、こうした新しい女性性の独自性と複雑性は中国の既存研究では長らく見落とされており、なぜそうした独自性が生じたのかも、いまだに中国の社会変動の中において解明されていない。

そこで、本稿は中国における新しい女性性の独自性を理解するために、少女から成人への移行に伴う女性性規範の変容およびそれを取り巻く社会構造という研究視座を提起することを目指す。1978年以降の市場経済への移行に伴う教育体制・市場体制の変容にもたらされた、少女から成人への移行における女性性の規範の変化と断絶が中国の新しい女性性を理解するうえで欠けてはならないものだと主張する。加えて、その視座から既存研究の課題を逆照射し、中国における新しい女性性に関しては、今後どのような研究の方向性が開かれるのかを示す。特権的な女性が提示する新しい女性性は、理想像として他の女性たちに広く参照される傾向がある (McRobbie 2016=2023)。そのため、この先駆的な層の動向に焦点を当てることは、中国社会におけるジェンダー秩序の変化やその行方を読み解く上で重要である。

以上の検討を通して、本稿は中国社会の独自性を明らかにするのみならず、欧米発の理論を相対化し、それに収まらない東アジア社会に対して、オルタナティブな理論枠を構築する際に示唆を提供することを目指す。新しい女性性に関する議論は、中国だけではなく日本においても活発であり、欧米発の理論を基盤に日本社会の独自性を実証的に検討する研究が蓄積されてきた (菊地 2019; 高橋 2020)。そのため、実態レベルで日本との比較は重要であるものの、本稿ではまず理論水準において欧米発の議論をローカライズする作業から出発する。こうした作業を通じて、日中における新しい女性性に関する共通点と相違点を見極め、ひいては日本における新しい女性性の独自性を浮き彫りにすることに寄与しうると考えられる。

上記の研究目的のもとで、本稿は以下のように構成される。まず、欧米発の新しい女性性に関する議論を概観し、その到達点と課題を解明する (第2節)。続いて中国の既存研究をレビューし、それらの研究に示唆される中国における新しい女性性の独自性を整理する。その際、特に中国エリート女性研究の最新の動向を紹介し、それらの研究に触発された、中国の新しい女性性を把握するための重要な研究視座——少女から成人への移行における女性性規範の断絶と変化およびそれを取り巻く中国の社会構造の独自性——を提起する (第3節)。その上で、ジェンダー秩序に関する歴史研究や実証研究を整理することで上記の視座の詳細を精緻化し、この視座によって示唆される、新しい女性性に関する既存研究の課題と今後の方向性を指摘する (第4節)。最後に、本稿で主な目的とする中国における女性性研究の理論枠を更新することを目指す

しつつ、日本社会における新しい女性性の状況と比較する可能性にも言及し、本稿を閉じる（第5節）。

2. 海外における新しい女性性研究の到達点と課題

2.1 新しい女性性が登場するまで：伝統的な女性性

欧米や日本のジェンダー研究やフェミニズム理論において、良妻賢母や従属的な性の対象としての「伝統的な女性性」は、近代化における公私領域の分離に基づく性別役割分業（Pateman 1988）、そして強制的異性愛に基づく構造の中で形成されたとされている（江原 2021）。近代産業社会では、男性は公的領域で働き手として、女性は私的領域で労働力の再生産やケアを担う存在として位置づけられており、家庭内では「母性」に特化された「家庭の天使」という女性像が理想とされた（Burstyn 1980）。さらに、異性愛規範のもとで、女性は性的対象として男性から評価され、自らの外見を調整するように求められる（江原 2021）。

2.2 新しい女性性という規範

近代家族と強制的異性愛に規定される伝統的な女性性と対照的に、新しい女性性は個人の能力に基づく人的資本の投資と管理、および個人の選択に関わるエンパワーメントをキーワードとしている（McRobbie 2020=2022）。こうした女性性の登場は、新自由主義の浸透とグローバルな労働市場の再編によって揺らぐ近代家族、さらに消費文化と結びついて生じたフェミニズム的感性の大衆化と深く関係している。

まず、福祉国家の縮小や収入不安により、共働きが一般化している。このような状況の中で、McRobbie (2020=2022) は、女性が労働者として資本主義に組み込まれ、労働への参加が女性に課される「義務」となるという新たな局面を指摘している。福祉に依存する女性は、怠惰な存在として道徳的に批判される傾向にある（McRobbie 2020=2022）。とくに、労働の強制化と道徳化が進む中で、経営者や管理職として「ガラスの天井を壊す」ことに成功した一部のエリート女性は、女性の社会的成功の象徴として称揚されている（Arruzza et al. 2019=2020）。単に労働に参加するのではなく、自らの人的資本を効率的に管理し、キャリア志向を持つこと自体が新しい女性性の規範として浮上してきた（Rottenberg 2018=2025）。

キャリア的な野心という規範は、成人女性だけではなく、少女にも影響力を及ぼす。学業的に優れている「成功的な少女（successful girl）」（Ringrose 2007: 485）になることが中産階級以上の少女が目指す目標となっている。こうした高い水準の教育を受けた「トップ・ガールズ（top girls）」たちは、ますます「経済生産に積極的に参加できる女性市民」になることが期待されており、「才能、成功、達成、楽しさ、権力、流動性、社会参加」（McRobbie 2009: 57-8）などのキーワードによって描かれている。

しかし、女性の労働参加は家事・育児負担の軽減を意味するわけではない。女性は「セカンドシフト」を担い続けている（Hochschild 1989）。このような状況のもとで、キャリアに成功しながらも、いい家庭生活を営む「新しい家庭の天使」が理想とされている（McRobbie 2020=2022）。

こうした母性に関する期待は、少女期においてはまだ顕在化していないものの、「養育的」な

ケアの役割や、「明るさ」「協調性」といった、人に好かれるような性格への期待に潜んでいる (Ringrose 2007: 485)。また、20 代の女性は大学キャンパスでカジュアルな性関係を結成し、または卵子凍結技術を使い、家庭関係の形成に時間を使うよりも学業とキャリアに力を使うという志向性を示している一方で、それはキャリアをある程度達成した 30 代でよりバランスの良い家庭－仕事関係を保つための一時的な自己管理である、と指摘された (Rottenberg 2018=2025)。

以上の変化に加えて、性的魅力についても、新しい側面が見られる。性的対象としての魅力は長らく女性に要請されてきた。第二波フェミニズムでは、性的客体ではなく、主体としての性の快楽や「セックスする権力」が闘争の中心となり、男性による美の基準が批判された (Wolf 1991=1994)。一方で、21 世紀以降のフェミニズムは、消費、大衆文化、メディアなどとの親和性が高まり、社会運動や理論枠組みとしてではなく、「ゆるい感性」として広く受容されるようになっていく (Gill 2007, 2017)。このようなフェミニズム的な感性は、性的魅力の磨きを肯定する消費文化に接続されている。この結果、美しさの追求や身体管理は自ら選び、楽しむものとして語られ、外見の魅力をめぐる抑圧や従属の構造が可視化されにくくなる、という新たな局面が見られる (菊地 2019; 高橋 2020)。とくに、近年では、美しさの資本化という潮流も生じ、外見の魅力は人に好かれる性格や、ネットワーク形成の巧みさとともに、労働・結婚市場における競争に寄与する能力とみなされている (Hakim 2011)。しかし同時に、それは常態化された自己監視・自己搾取の強化につながる危険性も孕んでいる (Gill 2007, 2017)。

こうした外見の魅力に関する女性性の規範は、欧米の若年女子をも深く巻き込んでいる。McRobbie (2009) は「新しい性契約 (the new sexual contract)」という表現を用いることで、少女たちには、拡大した教育・キャリアの発展空間を獲得する代償として、身体の自己管理や、化粧などの消費文化への参加が要請されていることを指摘した。また、少女が消費文化に深く取り込まれるようになるとともに、少女性は成人女性を取り巻く期待にも浸透しつつある。映画『ブリジット・ジョーンズの日記』の流行に象徴されるように、少女イメージに根ざした可愛らしくてドジな側面を持ち、外見の若さ、性的自由や恋愛結婚というロマンスを重視する少女性は、年齢の枠を超えて 30 代の女性にも求められる特質として大きな影響力を持っている (McRobbie 2009: 24-53)。

以上に見てきた新しい女性性の規範は、以下の二点において批判されている。

まず、労働・家庭・消費の領域を跨いだため、それぞれが要請する価値や行動はしばしば相互に矛盾し、それを同時に実現することが困難である。女性は、男性中心社会において男性的な成功に向かって競争に参入しながら、同時に、女性的な身体を体現し、母性に関する役割を果たさなければならない (菊地 2019)。それはすなわち、「男性的な競争の中で女性的な勝利を目指す」という矛盾した価値の統合を迫られることを意味し、女性は文脈や場面に応じて女性性の異なる側面を使い分けなければならない (菊地 2019: 77)。このような葛藤は、性的魅力を持ちつつも、かつ成功した学習者 (Ringrose 2007) になるように期待される少女から、すでに就労、出産したエリート女性に至るまで、さまざまなライフステージの段階で確認されている (Budgeon 2011=2020)。

また、個人の能力と選択を語る新しい女性性の規範は、階層や人種などの影響が個人の成功

に及ぼす効果を否定しつつあるため、女性の成功／失敗を取り巻く不平等な社会構造が曖昧になってしまう (Budgeon 2011=2020)。こうした新しい女性性の規範のもとで、発展途上国の女性や、階層的、人種的に不利な立場に置かれた女性たちが不可視化されつつある。彼女たちは低賃金の製造業工場労働者として商品を生産したり、グローバルなケア・チェーンの一環として働いたりすることを通じて、アッパー・ミドルクラス女性のキャリア・美しい外見・家庭生活の理想を支えている (McRobbie 2020=2022)。

このように、欧米中心の研究は新しい女性性に関する理論枠組みを立て、新自由主義がもたらした女性の社会的位置の変化、および新しい女性性における矛盾と排除性を明らかにした点で重要な役割を果たしている。一方で、中産階級の白人成人女性を主な対象とする以上の研究においては、少女から成人へのトランジションへの着目は少なく、また少女期は成人になっていく発展途上状態として扱われている。少女と成人女性はいくまでも共通して新しい女性性の規範に取り込まれたという論調が基本である。少女文化と少女性に関する代表的な McRobbie (2009) の研究においては、注目されているのは実は 10 代から 30 代までの若い女性である。また、McRobbie (2009) の論点の独創性は、むしろ少女性がいかに少女だけでなく、より年上の女性に対する社会的期待にも蔓延し、少女と成人女性を取り巻く女性性規範の境界を曖昧化しているのかにある。すなわち、McRobbie (2009) の少女文化研究は、むしろ欧米女性を取り巻くジェンダー秩序の連続性を裏付けているともいえる。

その結果、前節で述べた中国における新しい女性性の現象の独自性については、十分に対応する知見が存在していない。具体的に、欧米の既存研究では、新しい女性性の規範は内的緊張関係があるため、女性に葛藤をもたらすことは確かに指摘されたが、新しい女性性の特定の側面は理想から降格されたり、あるいは急に規範として昇格させたりすることは見当たらない。それと比較すると、中国において、少女から成人への移行において、性的魅力に関する社会的期待が急激に変化している側面が明確に見られている。さらに、既存研究では、キャリア的な野心や性的魅力、母性の全部を手に入れることの難しさが指摘されたが、母性に対する拒否や迷いなどの態度は十分に検討されていない。それに対して、中国のエリート女性の「恐婚恐育」は明らかに家庭とキャリアのバランス問題という枠に収まらない。

では、中国の既存研究においては、新しい女性性はどのように議論されてきたのか。

3. 中国における新しい女性性に関する研究

中国においては、欧米研究のように新しい女性性をジェンダー規範として捉えて理論化する研究はほとんど存在しない。一方で、労働や家庭、消費などの領域において、新しい女性性の理想がいかに個々の女性によって受け止められるのかを分析した研究はある程度蓄積されてきた。そこで、本稿はまず個々の女性の経験や語りに着目する研究から、中国における新しい女性性の独自性を整理する。これらの研究は欧米のフェミニズム理論や研究成果を援用しつつ、1970 年代末以降の計画経済から市場経済への移行という社会背景から、三種類の女性に着目している：仕事第一のキャリア女性、結婚や労働市場で美しさを利用する消費者女性、家庭と仕事の間にバランスを取ろうとする母親である。

3.1 新しい女性性の独自性に関する研究の到達点

まず、仕事を優先するキャリア女性についての先行研究を整理する。その背景として、中国の教育制度の整備と、「一人っ子政策」⁷がもたらした女性の教育機会の充実、および新自由主義の浸透がある。1990年代以降、中国の初等、中等教育が整備されており、教育を優先的に発展させることを通して、中国社会の「現代化」を図る「科教興国」戦略が打ち出された（南部・関口 2010）。歴史的に、娘は男性の兄弟との家庭資源をめぐる競争において常に敗者であったが、「一人っ子政策」のもとで生まれた中産階級以上の女性は、教育投資を受けるようになり、生活の境遇が大幅に改善された（Fong 2002）。加えて、新自由主義の浸透のもとで、教育投資を受けた娘たちは競争の意識を深く身につけている。以上のような背景のもとで、都市部の女性にとっては、教育を達成して、キャリアを築くことが彼女たちのアイデンティティ確立における最も重要な要素となっている（Zhou 2020）。こうした女性の特徴として、「仕事第一の倫理（work-first ethic）」（Tan & Wang 2024: 14）と、結婚や育児などの家庭責任を拒否する傾向（Tan & Wang 2024; Wu & Dong 2019）が挙げられる。彼女たちは欧米研究が指摘した新しい女性性の特徴、たとえばキャリア達成と経済的な独立の重視、自身の人的資本を計算・管理する傾向性を共通して有している（Rottenberg 2018=2025）。一方で、親孝行を重視する儒教文化のもとで、親からの結婚や出産に関する期待の影響を免れがたいという、独自の境遇も指摘された（Tan & Wang 2024）。

そして、結婚や労働市場で美しさを利用する消費者女性も新しい女性性を体現する典型として議論されてきた。その背景として、労働市場におけるジェンダー格差の拡大に伴い、女性の身体の「商品化と客体化」が生じ、美しさは女性の就労と結婚に寄与する一種の資本とみなされていることが挙げられる（呉 2009: 172-3）。加えて、この時期に、性的魅力への追求は、「グローバルな近代化」に中国が参加するシグナルとして好意的に受け入れられ、毛沢東時代における身体と性に関する管理と抑圧からの解放ともみなされている（Jacobs 2012）。以上に述べた背景のもとで、消費文化への参加は、女性のエンパワーメントと人的資本を増やす重要な方法とみなされている（Huang & Liu 2022）。結婚市場において、消費者女性は「従順さや自己犠牲を特徴とする伝統的な妻像に代わって、自身の性的魅力（および他の伝統的ならしさや家庭での役割遂行能力）を主体的に高めて、損得を計算する」ことを通じて、「自身の人的資本に見合った範囲内でもっとも経済力の高い男性を見極める」（Wu & Dong 2019: 479-80）。また、労働市場において、消費者女性は化粧や美容整形手術を通じて自身の外見を磨き、美しさを就職活動や昇進に寄与する一種の資本とみなしている（高 2018; Wen 2013）。このように、1990年代以降の中国社会においては、消費者女性には欧米のエリート女性と同じく個人の消費行動を通じて性的魅力を蓄積・利用する側面が見られる。それは、女性の解放や男女平等を個人主義的な消費文化へと矮小化したものとして批判されうる一方で（菊地 2019）、中国の文脈のもとでは、政治的抑圧からの解放という独自性も示している。

最後に、キャリアと育児を両立しようとするエリート女性も注目を浴びている。1990年代以降、福祉の縮小と育児の私事化を背景に、キャリアと育児の両立は深刻な社会問題として認識されるようになった（Mu & Xie 2016; Ji et al. 2017）。とくに、「一人っ子政策」のもとで、たった一人の子どもに対する育児基準が高くなり、時間と感情を多く投入するインテンシブな母親

業 (intensive mothering) の規範が広がっている (張 2023: 105-6)。その中で、中産階級のキャリア女性は仕事と家庭のバランスをとる母親像を「手が届かないスーパーマザーのイメージ」として捉え、自身の発展に時間を使うことが難しいと感じる (陳蒙 2018: 62-4)。そして、程度の差はあるが、この緊張関係は、一見キャリア、美しい外見と家庭生活の全てを手に入れる「辣媽 (super-hot moms)」からも見られている (沈 2014)。こうした新しい母親像は1980年代以降の急速な近代化に伴って広がっている「自分のために生きる」という価値観⁸に基づき、伝統的な母親規範からの解放につながる側面がある (沈 2014)。一方で、その解放は外見をめぐる消費の領域にとどまり、家庭内の権力関係や公的領域における女性の位置には及んでいない、とも批判された (沈 2014)。さらに、近年では、若い高学歴女性の育児拒否の傾向性も論じられ始めた。若年エリート女性は、育児に伴う金銭的・時間的投資、キャリアと家庭の両立の困難、出産と育児がもたらした産後太りや妊娠線など身体変化に対する不安と美的理想の抑圧性から、出産と育児に対して葛藤を抱えている、と指摘された (胡 2024)。このように、母性に関する新しい側面が論じられている際に、中国の新しい母親像の理想は欧米のそれと似ている一方で、それぞれの母親像を取り巻く社会背景は異なる。中国では、新しい母親像を造り上げたのは、「一人っ子政策」がもたらした育児期待の高まりと、近代化に伴う「自分のために生きる」という考え方である。また、中国のエリート女性は、出産の有無にかかわらず、キャリア・美しい外見・家庭生活の並立を肯定するよりも、むしろその間に明らかな葛藤を抱えている点において、もう一つの独自性が見て取れる。

3.2 新しい動向

既存研究は示唆に富む一方で、欧米研究と同様に、主に成人女性に焦点を当ててきた。少女から成人への移行で生じるキャリア的な野心と性的魅力の関係性の変化や、家庭生活における役割を取り巻く葛藤を看過してきた。本項では、その移行の視点に基づく新たな研究動向を紹介し、それらの研究に触発されつつも、中国の新しい女性性に関する独自性を再検討するための視座を提示する。

新しい女性性に関する直接的な言及はないものの、中国における中等教育から高等教育、職場へ移行する際に、学校教育で抑圧されていた美しさが労働市場で能力として扱われるようになることで生じる社会的期待の変化を高学歴女性がどのように受け止めているかを描き出した最新の実証研究がある (馮 2025)。この研究によると、中国の高学歴女性は小さい頃から激しい受験競争と厳しい学校管理のもとに置かれており、中等・高等教育段階では、美しさが勉学の妨げとみなされる男性基準の能力観を身につけた。こうした能力観を貫いた結果、一部の女性は高学歴を達成したものの、美的能力を求める労働市場では挫折し、結婚市場で美しさを利用する状況に追い込まれた。それに対して、もう一部の高学歴女性は、長らく美しさの追求を抑圧されてきたが、就職活動で美しさも能力の一環と認めた。職場では、彼女たちは元気の良さや清潔感を仕事への意欲の提示と読み替えることで、男性基準の能力観と女性のみ求められる能力としての美しさとの間で折り合いをつけている。

また、馮 (2024) による中国のエリート女性が少女から成人までのトランジションにおいて身につけた少女性という独自の美意識に関する検討も、新しい女性性を理解するうえで示唆を

与える。馮（2024）は中国の高学歴女性の間で流行っているロリータ・ファッション文化に着目して、高学歴女性が成人してから少女性を求める理由、および彼女たちによる少女性の意味づけを解明した。具体的に、中国の中等教育段階では、男性基準の能力観が支配的で、第二次性徴や長髪など女らしい身体的特徴の表出や化粧は校則や学校制服によって抑圧される一方で、女性に向けた消費文化は少女にも影響を及ぼす。こうした女性性に関するダブルバインドにより、高学歴女性たちは少女時代の欠如を感じている。そして、成人女性への移行の中で、女性性は今度要請されるようになる。そこで、リボンやレースで装飾され、女性性を過剰に表出するロリータ・ファッション文化の少女性は、男性基準の能力観からの脱出と女性性の回復と意味づけられながら、主流となる異性愛的な美意識、たとえば「清楚でかわいらしい美少女」というイメージと主体的に交渉するツールでもある。

新しい女性性を捉える際に、この二つの研究は以下の二点で示唆に富んでいる。

まず、中国の少女と成人女性が直面している女性性の期待に相違があることが実証されている。少女期には、男性並みに学業を達成することが理想とされるが、成人女性になると、ようやく欧米と同様に、外見の魅力を有するキャリア女性が理想とされるようになっていく。とくに、McRobbie（2009）が指摘した、少女から成人女性まで貫く少女性の期待と比べると、中国において少女時代における女性性への抑圧と、成人してから少女性を追い求めるといった現象は移行期におけるジェンダー規範の断絶を鮮明に表している事例ともいえる。

そして、馮（2025）は、研究背景と先行研究で短く触れたが、こうした女性に対する期待の変化の背後には、社会主義のイデオロギーを唱える学校教育と市場化が進んだ労働・結婚市場との間に生じたジェンダー規範の非連続性があると指摘した。中国では、市場経済への移行を背景として、労働市場ではジェンダー格差が拡大し、性的魅力や家庭内の役割は女性に期待されるようになっていく一方で、学校教育においては「社会主義の優越性」が主張されつつあり（宇 2020）、毛沢東時代以来の「女性が男性基準に合わせる」ことを志向する性別平等理念が継承されている（周 2008）。「ニュートラルな生徒像」が理想とされ、美しさの追求や恋愛など、女らしいとされる要素が学校管理のもとで厳しく統制されている。

以上の指摘は、前節で述べた中国の新しい女性性の独自性の一部に解釈を与えたともいえる。にもかかわらず、馮（2024, 2025）の研究では、毛沢東時代と市場経済時代における女性性の理想が具体的にいかなるものなのか、キャリア的な野心・性的魅力・母性はどのように位置づけられるのかは詳しく説明されていない。また、時代の変遷における女性性の理想の変化がいかにして今日の学校教育や労働・結婚市場、消費文化との間でジェンダー秩序の変化と断絶を引き起こし、最終的に個々の女性が成長の過程で女性性を引き受けることに影響を与えるのかという、歴史的変遷と個人の生活史との相互関係についても分析されていない。こうした研究上の課題により、キャリア志向や美しい外見、家庭生活での役割との複雑な関係性についても議論の余地があり、それらの要素を取り巻く社会構造の解像度も低いままである。

以上を踏まえて、次節では、毛沢東時代から市場経済時代への移行の中で、少女から成人への移行を取り巻く女性性の規範を概観した上で、中国の大きな社会変遷はいかに女性のライフステージに織り込まれてきたのかを分析する。それを通じて、社会変遷に刻印された少女から成人への移行における女性性の変化という視点を提起し、今日の新しい女性性研究を批判的に

問い直すための土台を作る。

4. 毛沢東時代から市場経済時代への移行における女性性の変容

本節では、毛沢東時代のジェンダー秩序に焦点を当てる研究と、市場経済期における新たなジェンダー秩序の形成に着目したものを概観し、キャリア的な野心・性的魅力・母性に関する女性性の変容を整理する。一方、これらの研究は成人女性を対象としており、女性性はもっぱら成人期において論じられている。そこで、本稿では教育社会学の議論を取り上げ、学校教育や少女期における女性性を整理する。

4.1 毛沢東時代における女性性

毛沢東時代においては、女性の解放は旧体制に対する改造と社会主義国家建設の一環として国によって積極的に推し進められてきた。「天の半分を支える（能頂半边天）」女性労働者の育成は、社会主義的な女性解放の中核と位置づけられ、公的領域における男女平等は国によって積極的に推進された（呉 2009）。この背景のもとで、女性の解放は、男性の基準に合わせることに、すなわち女性の男性化という特徴を持つと指摘された（呉 2009: 164）。

具体的に、労働の領域において、農業や工業生産で、男性と同様の肉体労働を担い、ときに生理的限界に挑む「鉄の娘」が理想像とされていた（金 2006）。一方、女性が男性並みに労働に参加することが期待されたにもかかわらず、家庭という私的領域では、国家による集団保育や公共食堂などの福祉制度が家事労働の負担を緩和していたが、女性は依然として家事と育児の主な担い手であった（宋 2011）。こうした家庭内の性別分業は、女性の労働参加と男女平等のイデオロギーのもとで隠蔽されており、表面的な平等は確かに達成されていた（Ji et al. 2017: 766-7）。また、この時期には、セクシーさの表出は資本主義的色合いを帯びた行為として厳しく禁止され、当時の女性が胸の膨らみを隠す行動に象徴されるように、「非性的」であることもこの時期のジェンダー秩序の特徴である（黄盈盈 2020）。

この時期には、教育のあり方も国が唱えるイデオロギーに大きく規定された。当時、女性の教育水準を高めることは、女性の解放の重要な一環とみなされ、教育の内容と形式で男女平等の理念が掲げられていた（周 2008）。当時の教育実態に関しては研究上の言及が少ないものの、教育を支えるのは、女性が男性と同様に社会労働に参加することに重きを置いたマルクスとエンゲルスによる女性解放論である（王曉慧 2015）。当時の教育の目標も、社会主義現代化建設に貢献できる人材の育成であると指摘された（南部・関口 2010）。このような指摘から、学校教育を取り巻くジェンダー秩序は、成人女性をめぐるそれと共通するものであると推測される。

すなわち、毛沢東時代においては、少女と成人女性を取り巻く社会期待には大きな断絶がないといえるだろう。

4.2 市場経済への移行における女性性 成人女性を取り巻く女性性の期待

1978年の改革開放政策を端緒にして、中国は計画経済から市場経済へと移行した。こうした背景のもとで、労働の計画的な配分の代わりに労働の市場化が生じ、福祉の縮小と家庭の私事

化が起き、消費文化が大いに発展した。経済体制の変化とともに、この時期に、新自由主義は中国社会に浸透し、女性政策に大きな変化をもたらした。中国国務院が1995年に頒布した『中国婦女発展綱要』の中で、婦女という概念は、平等と解放を求める一つの社会集団から、個人としての女性を指す概念へと変化した（陳蕊 2025）。政策上、女性が男性並みに社会進出することが依然として提唱されているが、その目標の実現は福祉と法律によって保障されるよりも、女性の自助努力と個人の能力を通して達成されるものへとすり替わった（呉 2009）。

以上の背景のもとで、労働、家庭、消費の諸領域において、「男女間の差異（男女有別）」と「再女性化（回帰女性）」はジェンダーに関する社会的議論の基調をなしている（王政 1997；呉 2009）。女性の社会進出は依然として唱えられているが、それは国に保障される女性の権利としてではなく、個人の努力と成功を称揚するものとみなされている（呉 2009）。

具体的に、労働の領域においては、80年代以降、国営企業は経営不振の危機に遭遇し、国によって女性に仕事を配分する体制が維持できず、多くの労働者が失業状態に陥っていた。こうした危機のもとで、女性労働者は生産コストを削減するための調整装置と位置づけられ、「女性は家庭に帰れ（婦女回家）」という差別的な考え方が当時の中国社会で広まっていた（宋 2011）。このように、女性は社会進出すべきだとする毛沢東時代の考え方は、文化的には依然として影響力を持っているが、労働市場におけるジェンダー格差は顕在化し、男性と同様に労働市場へ参加する理想は破綻しており、女性は構造的に不利な位置へと追い込まれている（宋 2011）。

公的領域におけるジェンダー秩序の変化は家庭という私的領域での変化と連動している。毛沢東時代における集団的な育児制度はなくなり、育児の責任は女性個人に押し付けられている。こうした家事の私事化は、競争が激しくなった労働市場における女性の位置をさらに低下させ、彼女たちは「二流」の労働者とされている（宋 2011: 9）。

この時期には、性的魅力の強調もジェンダー秩序の変化の重要な一側面をなしている。市場経済への移行のもとで、女性の身体の商品化が生じており、それが毛沢東時代の男女画一で禁欲的な文化に取って代わった（Barlow 2004）。一方、この時期に、性的魅力への追求は、中国の近代化とグローバル化のもとで、毛沢東時代の抑圧的な政治からの解放と個人の自由と権利を求める象徴とみなされている（Jacobs 2012）。消費文化研究では、消費活動は自分のために生きる欲望や、エンパワーメントとの関わりで解釈されている（丁 2016）。こうした背景のもとで、女性の労働はまた性的魅力に関するジェンダー規範に再編されている。その再編を象徴するのは、サービス産業に女性が大量に参加したことである。数多くの女性は、市場経済への移行と国営企業の経営不振に伴い、国有経済体制の下で工場労働者や公務員など「鉄飯碗」と呼ばれる比較的安定した職から、「青春飯」と呼ばれる、若さや外見の魅力に依存する不安定なサービス業へと構造的に移行している（Hanser 2005）。こうした移行は、外見の魅力や若さが女性労働者を評価する重要な基準となっていることを象徴している（Hanser 2005）。こうした変化はサービス産業にとどまらず、市場化した中国労働市場の全体的な変化として位置づけられている（Wen 2013）。近年、都市部では、労働市場の競争の激化とルッキズムの普遍化を背景にして、女子大学生やホワイトカラーの女性にとっても、魅力的な外見は競争で生き残る手段となっている（Wen 2013）。

少女を取り巻く女性性の期待

中国社会の複雑さと独自性は、共産党が依然として「社会主義の未来を守る（信守着社会主義の未来）」と主張し続けているという点にある（Dirlik 2009）。経済体制の転換は進められたものの、政治体制の変化は非常に限定的であるため、中国では学校が相変わらず社会主義国家建設に有用な人材を育成するための装置である（南部・関口 2010: 20）。激しく変化した労働市場、結婚市場と消費文化とは異なり、政府による直接的な管理のもとでは、学校、特に高等教育までの初等、中等教育段階では社会主義的なイデオロギーが唱えられ続けている（宇 2020）。

とはいえ、この時期に、新自由主義が教育の領域にも浸透しつつある。1990年代には、中国共産党は個人の「生得的および後天的に習得する身体的、心理的、知的、道徳、思想的資質およびその行動」を強調する個人の総能力を指す「素質（quality）」ディスコースを打ち出した（Jacka 2009: 524）。これを通して、自己管理・投資する新自由主義的な主体を経済発展の動力の源として形成しようとしている（Yan Hairong 2003）。新自由主義的な主体を形成する国側の期待のもとで、1999年に、『教育改革の深化と素質教育の全面推進に関する決定（關於深化教育改革全面推進素質教育的決定）』という教育方針が頒布され、国民の素質を高め、国際競争と国の発展に寄与する個人を育成することが強調される（國務院 1999）。

こうした背景のもとで、努力と能力を強調する新自由主義と、社会主義的なジェンダー秩序とが一緒に、少女を学業の競争に参加するように煽っている。

具体的に、少女期に該当する初等、中等教育段階においては、社会主義の跡継ぎは性別に関わらない存在とされており、それを育成するためにはジェンダーの平等を唱える「性別中立教育」が行われている（周 2008）。性別中立教育のもとでは、男女が同一の教育内容を受け、同じ選抜基準に当てられるのは法律によって保証され、男女共学も基本的である（周 2008）。また、こうしたイデオロギーのもとで、毛沢東時代の男女画一で禁欲的な文化と似通っている特徴が学校文化の中で見て取れる。それを典型的に示したのは、学校による権威と管理の象徴である男女画一の学校制服と、恋愛禁止の規定である。中国では、学校制服はゆったりとした運動服の形をとっており、女性の第二次性徴の発達を隠す機能が期待されている（銭 2007）。こうした学校制服からみれば、期待される生徒像は毛沢東時代における男性を基準とする、脱女性化した女性像と共通する部分がある。加えて、小中学生段階で結ばれた恋愛関係は、生徒の成長と学業の達成に悪い影響を与えるものとして問題視され、学校管理のもとで厳しく禁止され、管理されるものでもある（徐 2002）。欧米圏の研究との比較を通じて、こうした小中学生の恋愛に対する問題視と規制は、中国教育特有の傾向だと指摘された（劉・李 2015）。こうした学校管理のもとで、消費文化の影響力は確かに学校にまで浸透したが、少女が担い手である少女文化が不在であり、消費文化や恋愛に参加できない少女たちは「少女時代の空白」を感じている（馮 2024）。

ニュートラルな生徒像は、社会主義のイデオロギーだけではなく、新自由主義のもとでの競争理念によっても生産されている。先述したが、「一人っ子政策」のもとでは、少女は教育投資の対象となり、男子との学業競争に参加している（Liu 2014）。激しい受験競争に参加する一人っ子の娘たちは学業の成功を達成するために、男らしさ、たとえば逞しさ、自信、競争心などをより理想的な特質とみなし、女らしい特質を自発的に抑圧する傾向にある（Liu 2014）。とり

わけ、性的魅力の追求は、勉強の妨げとして少女自身によって管理されている（馮 2025）。ここで注目してほしいのは、これらの研究における女子生徒の男性化は社会主義イデオロギーが示すニュートラルな生徒像とその背後にある学校の管理主義とは異なり、学業の競争に勝つための自己管理と自己投資という側面が大きいということである。こうした自らの女性性を抑圧する自己管理の背後に、中国の学校教育における男性の優位性がある。中国では「理系を重視して文系を軽視する傾向（重理軽文）」がある。こうした傾向が、男性が女性よりも理系に向いているという広く流布した考え方と結びつけられた結果、一見性別中立ではあるが、実質的には男性優位の能力観、すなわち男性を基準とする平等というジェンダー秩序を形成している（周 2008）。このように、男性優位の学校文化のもとで、一人っ子の娘たちは新自由主義的な自己管理・投資を経由して、結果としてニュートラルな生徒像を補強している。

4.3 少女から成人への移行における女性性という視座から得られる示唆 移行期における新しい女性性

以上を踏まえると、中国における独自の歴史的変遷は、少女から成人への移行の中に織り込まれており、少女と成人女性は異なる女性性の期待に取り巻かれていることがわかる。市場経済への移行の中で、少女たちは男性と同様に教育競争に参加し、社会進出を目指しながらも、彼女たちの男性基準のキャリア志向と女性性の抑圧は、社会主義イデオロギーと新自由主義の競争原理の両方から維持されている。要するに、少女にとって新自由主義下のキャリア志向は、男性基準の能力観と女性性に対する自己管理を通して、毛沢東時代の男性を基準とする男女平等のジェンダー秩序と連続性を保っている。そして、美しさの追求や異性愛関係への抑圧もまた、新自由主義的な競争のロジックに結び付けられている。

しかし、市場経済体制に移行した後、教育段階では女子が男子生徒への同一化を通してキャリアの理想をある程度達成していても、男女格差が顕著な労働市場においては、女性が不利な立場に置かれている。加えて、成人女性にとっては、労働、家庭、消費などの領域において、小さい頃に経験してきた女性性の抑圧に代わり、むしろ女性性の獲得が期待され、さらに人的資本の一環ともみなされるようになっていく。要するに、今日の中国社会において、女性は毛沢東時代に唱えられたキャリア志向を持ち続けたにもかかわらず、当初は男女平等な労働者としてのキャリア志向だったが、新自由主義体制においてそのキャリア志向は、男性優位の労働市場において個人の自助努力を要求する規範として再編成されている。そして、性的魅力と家庭生活での役割は毛沢東時代の女性性にとって代わるものとして復活していると同時に、新自由主義的な色合いを帯び始め、人的資本の一環とされている。

以上を踏まえて、成人女性と少女は、男性並みに教育競争、労働市場の競争に参加する志向性を共有する一方で、男女間の格差の度合い、および女性性の側面において大きな隔たりを有している。

このような女性性の期待の変化のもとで、中国のエリート女性の少女から成人への移行における新しい女性性の内実とは、移行のプロセスを貫く新自由主義による毛沢東時代的な男性基準のキャリア志向の再編と、移行の中で生じた女性性の抑圧からの解放、さらに人的資本への再構築である。

本稿は、近代中国社会の歴史変遷における価値観や制度の変化と混在が、今日のエリート女性個人のライフステージに編み込まれたことを「移行期における新しい女性性」として位置づけたい。

今後の方向性

以上の視座のもとで、中国の新しい女性性を研究するために、いかなるヒントが与えられているのか。

第一に、この視座を通じて、中国の新しい女性性の特徴として、中国のエリート女性には男性並みに業績やキャリアを蓄積することは一貫して求められるが、性的魅力と家庭内の役割は少女期に抑圧され、成人期に入った途端期待されるようになることが明らかになる。そこで、成人女性に焦点を当てた既存研究とは異なり、就学する少女期から、就労・結婚・出産する成人期までの長期的な生活史研究を通じて、中国における新しい女性性を明らかにする必要があるだろう。

第二に、この視座のもとでは、キャリア的な野心が、性的魅力や母性といかに相互作用するのかを検討するための、重要な方向性がいくつか示されている。

まず、少女期について、学校教育では男性優位のジェンダー構造が確かに見られているものの、少女たちのキャリア志向は男女平等を明確に打ち出した学校という社会体制によってある程度担保されている。一方で、労働市場においてキャリア的な志向は理想として謳われつつあるものの、社会制度はそれの実現を阻害する、男女非対称な状況にある。このキャリア志向とそれを取り巻く実現可能性の落差の背後にあるのは、学校から労働市場への移行における新自由主義的な原理の顕在化と国によって保障される権利の後景化である。そこで、キャリア志向を学校教育から就労までのより長期的なスパンにおいて詳しく検討する必要がある。とくに、以上の視点の提起は、確かに中国社会の文脈に基づいたものだが、学校教育における男女平等の浸透と相変わらずに男性優位である労働市場との断絶は、欧米や日本でも共通して見られる(England 2010; 木村 2005)。ここで提起した視点は、中国のローカルな文脈を超えて新しい女性性に関する議論に寄与する可能性が考えられる。

また、新しい女性性に関する既存研究は、主に人的資本の観点から美しさとキャリアの関係性を論じているが、余暇としての消費行為を分析の俎上に乗せていない。しかし、中国における性的魅力という規範の独自性は、学校文化による管理とそれからの脱出に根ざしているともいえる(馮 2024)。この観点からすれば、学校文化に深く巻き込まれたエリート女性による性的魅力への追求を理解するために、人的資本のロジックに回収されない余暇や解放性の視点は重要である。美しさに関する期待に乗っかることは、必ずしも人的資本の管理・投資、あるいは性的主体としての陶醉ではない。馮(2024)が着目したロリータ・ファッション文化が示すように、エリート女性による少女性の追求は、学校管理からの脱出という側面と異性愛的な美意識と距離を置く抵抗性も有している。こうした人的資本と余暇の両面から美しさを捉える視点で、先述したエリート女性に見られる複雑な美意識——元気の良さ、清潔感という能力主義と関わる要素や、少女性の抵抗的な側面——がいかに醸成されるのかを解明することにもつながる(馮 2024, 2025)。この問いは、「セックス」という欧米の美意識や、McRobbie (2009) が

論じた、外見の若さを強調して恋愛結婚という古典的ロマンスを意味する少女性と区別する、中国の新しい女性性の特徴を説明するうえでは欠けてはならないものである。

さらに、母性とキャリア的な野心や性的魅力の関係をより精緻に検討する余地も見られる。Fraser (2013) が指摘した「生産と再生産の矛盾」を踏まえれば、小さい頃から教え込まれてきたキャリア的な野心と、再生産の担い手としての役割との緊張関係は、出産に対する不安を引き起こすと予想される。こうした「生産と再生産の矛盾」を中国社会の文脈に沿って理解すると、一人っ子として教育の投資とケアを長らく受けた娘は効率と功利の論理を身につけたが、ケアすることに必要な贈与の感性をどれくらい抱えるのかという、近年の若者に見える「他者の道具化」(項ほか 2025) につながるかもしれない。ここでは、キャリアと育児の葛藤を、より長い生活史のもとで理解する必要がある。さらに、美しさに対する抑圧を経験してきた女性にとって、成人期においていきなり求められる性的魅力の規範は、適応困難であると同時に、管理からの解放感や、困難を克服する達成感につながる可能性もある。そのようにしてようやく手に入れた美しさが妊娠、出産によって損なわれることは、深い喪失感をもたらす可能性がある。「妊娠線恐怖」や「産後太りへの恐怖」などのネット言説は、その種の葛藤を象徴的に表しているといえる(胡 2024)。そこで、美しさの抑圧から期待への変化との関わりで出産に対する抵抗感を検討する必要もある。

最後に、こうした新しい女性性のあり方の背後には、社会主義中国的なジェンダー観と新自由主義的なジェンダー観、すなわち男性を基準とする男女平等の理念と、ジェンダーを問わずに能力のある個人の成功を謳いながら女性性を要請する新自由主義的なジェンダー観が混じり合った状態が窺える。ゆえに、中国における新しい女性性の検討を通じて、個人化や儒教文化などの社会構造の側面に加えて、社会主義と新自由主義の重なりによって造り上げられた独自のジェンダー構造を明らかにする可能性があるだろう。新自由主義が研究上のマジックワードと化している現在、それがいかに特定の社会的、歴史的な文脈に織り込まれているのかを問うことは、ますます重要な課題となっている。新しい女性性に関する中国の事例に対する検討は、新自由主義の内的多様性と豊富性につながる作業ともいえる。

5. おわりに

本研究は、新しい女性性という世界中に大きく注目されているジェンダー秩序の最新の変化における中国の独自性に着目した。欧米や中国の既存研究を整理した上で、中国における新しい女性性を理解するための視座——毛沢東時代から市場経済への移行に伴う女性性の変化に刻印された少女(教育)から成人(市場)への移行——を提起し、そしてこの視座から今後の研究方向を見出した。こうした試みは、新しい女性性研究の内部多様性に光を当てている。

近年、日本のアカデミアにおいても、新しい女性性や『Lean In』(Sandberg 2013) は議論の焦点となっている。代表的な研究として、「女子力」という日本ローカルな理想のもとで、外見の美しさや家事能力などの伝統的な女性性が管理・投資可能な能力へと再構築されていることが指摘された(菊地 2019)。また、女性のキャリア的野心を強調するネオリベラル・フェミニズムの感性の流行について、アメリカと比べて大卒の女性の離職や非正規雇用が多い日本社会では女性間格差が比較的小さいという特徴が指摘され(落合 2025a)、また男性稼ぎ主型社会福祉

システムから排除された未婚女性の問題への注意も促されている（落合 2025b）。一方、それらの研究は主に成人女性を研究対象としている。しかし、移行の視点からみれば、日本社会もまた、教育段階において男女平等の理念が浸透し女性の高学歴化が進む一方で（木村 2005）、労働や家庭領域におけるジェンダー格差が依然として大きく、さらに美しさ規範の強制力が強いという特徴をある程度共有している。そういう意味で、日本のキャリア志向のエリート女性もまた、少女から成人へ移行する中で、女性性に関する混乱や葛藤を抱えるかもしれない。そこには日中の間に共通点はあるつつも、差異もある。とくに、日本では、むしろ化粧や脱毛など、いわゆるおしゃれの低年齢化が女子文化の特徴として位置づけられている（会場 2023a, 2023b）。しかし、新しい女性性に関する日本の既存研究において、少女期に関する言及は少ない、また少女と成人女性との比較はほとんど研究されてこなかった。こうした状況に対し本研究は、日本における新しい女性性を捉えるうえで少女から成人への移行の視点の重要性を示し、さらには日本社会の独自性を浮き彫りにする参照枠を提供しようと考えられる。

一方、本稿はあくまでも新自由主義が深く浸透し、グローバル化が最も進展してきた都市部における中産階級の高学歴エリート女性を対象としたものである。都市と農村との間の格差、また階層間の格差が大きい中国では、農村女性の状況や、低学歴または低所得層の女性はいかなるジェンダー構造に直面し、少女から成人への移行はどのようなありようを有するのかについては、今後の課題として検討する必要がある。特に、エリート女性に提示される新しい女性性の影響力は特権的な女性の内部に限らず、一種の社会的理想として多くのリスク層の女性を巻き込んでいる可能性がある。例えば、欧米では、労働者階級出身の女性は自身の当面の収入や物質的な生活状況にもかかわらず、メディアやポピュラー文化におけるエリート女性が発信する成功のロマンスに影響され、キャリア的野心を身につけて不安定な労働に自ら進んで従事し、身体的魅力を造り上げることを主体性の記号とみなす動向も見られている（McRobbie 2016=2023: 149-68）。それを踏まえて、本稿の知見をスタートラインとして、新しい女性性を階層の視点からより精緻に考察することも重要な課題である。

注

1. 本稿では、「性的魅力」は単にセクシーさを意味するのではなく、江原（2021）や高橋（2020）を参照し、異性愛規範によって規定される広義の美を指す。
2. 第一波、第二波という分類のほか、フェミニズムの中では、数多くの流派があり、フェミニスト研究者たちは異なる立場から各流派のフェミニズムの主張を批判し合う。その中では、2010年代以降、特に女性性の新たな変化に着目し、『Lean In』ブームに目を配るのは、新自由主義的な価値観を持つネオリベラル・フェミニズムを批判的に捉える研究、フェミニズムがすでに実現したため、不要なものとしたポストフェミニズムを批判的に問う研究、そしてフェミニズムの女性解放思想と消費文化との結託を特徴とするポピュラー・フェミニズムを議論する研究である。ネオリベラル・フェミニズム批判研究では、女性のキャリアと家庭のバランスがいかに新たな強制的なルールとなり、女性はいかに自身の身体や情動などを含むすべてを人的資本へと変換して新自由主義に収奪されるのが批判されている（Evans 2015; McRobbie 2020=2022; Rottenberg 2018=2025）。ポストフェミニズム批判研究

においては、女性のエンパワーメントを消費文化への参加と同一視する言説が問題視され、裕福さや美しさ、円満な家庭生活を体現する完璧な母親像も批判的に検討されている (Gill 2007; McRobbie 2009, 2015)。ポピュラーフェミニズムを議論する研究は、女性がいかに男性並みの成功と性的魅力に代表される女性性に関する期待の間に葛藤を感じるのかを論じている (Budgeon 2011=2020)。

3. 本稿では、中国における新しい女性性を検討する際の対象を、大学以上の学歴を持ち、比較的裕福な都市中産階級出身の若い女性に絞る。『中国人口普查年鑑 2020』(國務院第七次人口普查領導小組編 2020)によれば、中国の女性人口は約 6 億 8800 万人であり、そのうち学士号を持つ女性は 4652 万人、修士号を持つ女性は 477 万人、博士号を持つ女性は 50 万人である。そのため、大学以上の学歴を持つ女性は女性人口の 7.5%しかいない。近年では、若年女性の教育水準が大きく向上し、2020 年の時点で 54.4%に達しており (國家統計局 2021)、「高等教育の女性化」が進行している (周・張 2022: 79)。一方で、都市と農村の大きな経済格差の中で、女性学歴獲得にはまだ大きな格差があり (大浜 2013)、消費社会への参加も程度の差がある。こうした背景のもとで、新しい女性性に関する中国の先行研究は、学歴に関するより詳しい区分を明示していないが、主に比較的裕福な都市中産階級の高学歴女性を対象にしている (Tan & Wang 2024; Wu & Dong 2019)。本稿も既存研究に依拠し、分析対象をその層に限定する。
4. 官製メディア「央視新聞」(2025)によると、中国の大学入試が終わる 7、8 月には中国の美容整形の施術数が 3 割増加し、主な手術対象は大学入試を終えたばかりの女性である。
5. 「中国青年報社社会調査中心聯合網」が行った未婚青年を対象とした調査によると、2021 名の調査対象者の中で、68.2%が「結婚の催促 (催婚)」を経験したことがある (中国新聞網 2022)。
6. 『“80 後”、“90 後” 中国青年婚恋観』という調査報告書によると、30000 人超えの調査対象者の中で、76%の結婚適齢期の青年が結婚に対して恐怖感を抱えている (人民網 2015)。そして、穆光宗 (2020) は、官製雑誌『人民論譚』において、少子高齢化が進む中国では、出産適齢期の夫婦が抱える育児への抵抗感と不安が、中国社会全体にとって重要な課題であると主張している。
7. 「一人っ子政策」とは、1979 年から 2015 年まで実施された、一組の夫婦につき子どもは一人までという産児制限政策である。都市部を中心に実施され、農村部では例外が設けられた。2016 年には、すべての夫婦に二人までの出産を認める「全面二孩政策」が導入され、「一人っ子政策」は廃止された。
8. 「自分のために生きる」という考え方を取り巻く社会背景として、社会的流動性の高まりに伴い、宗族、家族、国といった集団への従属とその利益への献身を重視するかわりに、個人の利益を追求する「個人化」の風潮が生じていることが挙げられる (Yan Yunxiang 2009=2012: 3)。沈 (2014) においては、「自分のため」という表現は、喜んで他人のためにサービスを提供し、献身することに対する拒否を意味するために、伝統的な母親規範からの解放という要素を有する。

参考文献

- 合場敬子, 2023a, 「無毛化する女子高生の身体」『女性学』30: 52-72.
- , 2023b, 「化粧による女子高生の身体構築」『国際学研究』63: 1-19.
- Arruzza, Cinzia, Tithi Bhattacharya & Nancy Fraser, 2019, *Feminism for the 99%: A Manifesto*, London: Verso. (恵愛由訳, 2020, 『99%のためのフェミニズム宣言』人文書院.)
- Barlow, Tani E., 2004, *The Question of Women in Chinese Feminism*, Durham: Duke University Press.
- Budgeon, Shelley, 2011, “The Contradictions of Successful Femininity: Third Wave Feminism, Postfeminism and ‘New’ Femininities,” Rosalind Gill & Christina Scharff eds., *New Femininities: Postfeminism, Neoliberalism and Subjectivity*, London: Palgrave Macmillan, 279-92. (芦部美和子訳, 2020, 「成功した(サクセスフル)女性性の矛盾——第三波フェミニズム, ポストフェミニズム, そしてさまざまな「新しい女性性」」『現代思想』48 (4): 169-83.)
- Burstyn, Joan N., 1980, *Victorian Education and the Ideal of Womanhood*, London: Routledge.
- 陳蒙, 2018, 「城市中産階層女性的理想母職叙事——一項目基于上海家庭的質性研究」『婦女研究論叢』146(2): 55-66.
- 陳蕊, 2025, 「性別話語日益喧沸, 竟是源于一段被折疊的婦女解放史?」『文化縱橫』1 (2025 年 8 月 11 日取得, <https://mp.weixin.qq.com/s/pEYGBdDpLsZGZ2iqhm-7AA>).
- 丁瑜, 2016, 『她身之欲——珠三角流動人口社群特殊職業研究』社会科学文献出版社.
- Dirlik, Arif, 2009, 「重訪後社会主義——反思中国特色社会主義的過去, 現在和未来」『馬克思主義與現實』5: 24-35.
- 佟新, 2010, 「勞働力市場、性別和社会分層」『婦女研究論叢』101: 12-9.
- 江原由美子, 2021, 『ジェンダー秩序 [新装版]』勁草書房.
- England, Paula, 2010, “The Gender Revolution: Uneven and Stalled,” *Gender & Society*, 24(2): 149-66.
- Evans, Mary, 2015, “Feminism and the Implications of Austerity,” *Feminist Review*, 109 (1): 146-55.
- 馮可欣, 2024, 「少女時代の欠如と埋め合わせ——中国のロリータファッション文化参入者の生活史をもとに」『フォーラム現代社会学』23: 1-14.
- , 2025, 「中国の高学歴女性の美しさに対する意味づけの変化——学校から職場への移行に着目して」『ソシオロジ』69(3): 23-41.
- Fong, Vanessa L., 2002, “China’s One-Child Policy and the Empowerment of Urban Daughters,” *American Anthropologist*, 104 (4): 1098-109.
- Fraser, Nancy, 2013, *Fortunes of Feminism: From State-Managed Capitalism to Neoliberal Crisis*, London: Verso.
- 高修娟, 2018, 「身体管理と女大学生性別社会化」『中国青年研究』7: 26-32.
- Gill, Rosalind, 2007, “Postfeminist Media Culture: Elements of a Sensibility,” *European Journal of Cultural Studies*, 10 (2): 147-66.
- , 2017, “The Affective, Cultural and Psychic Life of Postfeminism: A Postfeminist Sensibility 10 Years On,” *European Journal of Cultural Studies*, 20(6): 606-26.
- 国家統計局, 2021, 『《中国婦女發展綱要(2011-2020 年)》終期統計監測報告』(2024 年 7 月 14 日取得, https://www.stats.gov.cn/sj/zxfb/202302/t20230203_1901316.html).

- 国務院, 1999, 『關於深化教育改革全面推進素質教育的決定』.
- 国務院第七次人口普查領導小組, 2020, 『中国人口普查年鑑 2020』中国統計出版社.
- Hakim, Catherine, 2011, *Honey Money: The Power of Erotic Capital*, London: Allen Lane.
- Hanser, Amy, 2005, “The Gendered Rice Bowl: The Sexual Politics of Service Work in Urban China,” *Gender & Society*, 19 (5): 581-600.
- Hochschild, Arlie, 1989, *The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home*, New York: Viking Penguin.
- 胡益頤, 2024, 「深度解碼——基于“知乎”文本挖掘的青年“恐育”叙事探析」『中国青年研究』11: 77-87.
- 黄燕華, 2024, 『走進酒吧的年輕女性——消費新時代的性別实践与身分認同』社会科学文献出版社.
- Huang, Yanhua & Zixi Liu, 2022, “Pursuing Individualism without Feminism: Leisure Life and Gender Politics of Young Female Bar-Goers in Urban China,” *The British Journal of Sociology*, 73(5): 1025-37.
- 黄盈盈, 2020, 「性之變——改革開放 40 年的梳理与思考」『社会学評論』8(2): 28-46.
- Jacka, Tamara, 2009, “Cultivating Citizens: Suzhi (Quality) Discourse in the PRC,” *Positions: East Asia Cultures Critique*, 17(3): 523-35.
- Jacobs, Katrien, 2012, *People’s Pornography: Sex and Surveillance on the Chinese Internet*, Bristol and Chicago: Intellect.
- Ji, Yingchun, Xiaogang Wu, Shengwei Sun & Guangye He, 2017, “Unequal Care, Unequal Work: Toward a More Comprehensive Understanding of Gender Inequality in Post-Reform Urban China,” *Sex Roles*, 77: 765-78.
- 金一虹, 2006, 「“鉄姑娘”再思考——中国文化大革命期間的社会性別労働」『社会学研究』1: 169-93.
- 菊地夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』大月書店.
- 木村涼子, 2005, 「教育における『ジェンダー』の視点の必要性——『ジェンダー・フリー』が問題なのか」木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』白澤社, 75-94.
- Liu, Fengshu, 2014, “From Degendering to (Re)Gendering the Self: Chinese Youth Negotiating Modern Womanhood,” *Gender and Education*, 26(1): 18-34.
- 劉録護・李春麗, 2015, 「校園“早恋”的中西比較研究」『中国青年研究』11: 109-13.
- McRobbie, Angela, 2009, *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*, London: Sage Publications.
- , 2015, “Competitive Femininity in Neoliberal Times,” *Australian Feminist Studies*, 30 (83): 3-20.
- , 2016, *Be Creative: Making a Living in the New Culture Industries*, Cambridge: Polity. (中條千晴・竹崎一真・中村香住訳, 2023, 『クリエイティブであれ——新しい文化産業とジェンダー』花伝社.)

- , 2020, *Feminism and the Politics of Resilience: Essays on Gender, Media and the End of Welfare*, Cambridge: Polity. (田中東子・河野真太郎訳, 2022, 『フェミニズムとレジリエンスの政治——ジェンダー, メディア, そして福祉の終焉』青土社.)
- 穆光宗, 2020, 「当代青年的“恐育”心理和生育観」『人民論壇』677: 120-2.
- Mu, Zheng & Yu Xie, 2016, “‘Motherhood Penalty’ and ‘Fatherhood Premium’? Fertility Effects on Parents in China,” *Demographic Research*, 35: 1373-410.
- 南部広孝・関口洋平, 2010, 「社会主義国の体制移行に伴う教育変容——ベトナムと中国を中心に」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57: 1-25.
- 落合恵美子, 2025a, 「男女雇用機会均等法と『ジェンダーの一九八五年体制』——男女平等は女性の分断を生むのか」『We Learn』850: 4-7.
- , 2025b, 「女性の活躍を銜いなく応援できるフェミニズムを——近代の何を継承するか」『書齋の窓』700: 92-8.
- 大浜慶子, 2013, 「中国の高等教育拡大にみる性差の構造」『中国女性史研究』22: 1-24.
- Pateman, Carole, 1988, *The Sexual Contract*, Stanford CA: Stanford University Press.
- Peng, Altman Yuzhu, 2020, *A Feminist Reading of China's Digital Public Sphere*, Switzerland: Palgrave Macmillan.
- 錢潔, 2007, 「校服——一種身体管理策略」『教学与管理』9: 17-9.
- 人民網, 2015, 「中国青年婚恋観調査報告——76%適婚青年恐婚」人民網 (2025年7月28日取得, <http://politics.people.com.cn/n/2015/0524/c70731-27047462.html>).
- Ringrose, Jessica, 2007, “Successful Girls? Complicating Post-Feminist, Neoliberal Discourses of Educational Achievement and Gender Equality,” *Gender and Education*, 19 (4): 471-89.
- Rottenberg, Catherine, 2018, *The Rise of Neoliberal Feminism*, Oxford: Oxford University Press. (河野真太郎訳, 2025, 『ネオリベラル・フェミニズムの誕生』人文書院.)
- Sandberg, Sheryl, 2013, *Lean In: Women, Work, and the Will to Lead*, New York: Knopf.
- 沈奕斐, 2014, 「辣媽——個体化進程中母職与女権」『南京社会科学』2: 69-77.
- 宋少鵬, 2011, 「“回家”還是“被回家”? ——市場化過程中“婦女回家”討論与中国意識形態轉型」『婦女研究論叢』106(4): 5-26.
- 高橋幸, 2020, 『フェミニズムはもういない, と彼女は言うけれど——ポストフェミニズムと「女らしさ」のゆくえ』晃洋書房.
- Tan, Chris K. K. & Yaxuan Wang, 2024, “Neoliberal Feminism and Work-Family Tensions among Professional Women in Beijing,” *Critical Asian Studies*, 57(1): 119-36.
- 王曉慧, 2015, 『近代中国女子教育論争史研究 (1895-1949)』中国社会科学出版社.
- 王政, 1997, 「“女性意識”, “社会性別意識” 辨異」『婦女研究論叢』1: 14-20.
- Wen, Hua, 2013, *Buying Beauty: Cosmetic Surgery in China*, Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Wolf, Naomi, 1991, *The Beauty Myth: How Images of Beauty are Used Against Women*, New York: William Morrow and Company. (曾田和子訳, 1994, 『美の陰謀——女たちの見えない敵』阪急コミュニケーションズ.)
- Wu, Angela Xiao & Yige Dong, 2019, “What is Made-in-China Feminism(s)? Gender Discontent and

- Class Friction in Post-Socialist China,” *Critical Asian Studies*, 51(4): 471-92.
- 吳小英, 2009, 「市場化背景下性別話語的轉型」『中国社会科学』2: 163-76, 208.
- 項飏・劉小東・何祿皮・李一凡・劉悅來・沈志軍・賈冬婷・段志鵬, 2025, 『你好, 陌生人——看見陌生人, 看見自己』中信集團出版社.
- 徐小娟, 2002, 「“防患”于未然——中學生“早戀”教育的策略」『中小學心理健康教育』6: 13.
- Yan, Hairong, 2003, “Neoliberal Governmentality and Neohumanism: Organizing Suzhi/Value Flow through Labor Recruitment Networks,” *Cultural Anthropology*, 18(4): 493-523.
- Yan, Yunxiang, 2009, *The Individualization of Chinese Society*, Oxford: Taylor & Francis Group. (陸洋 ほか訳, 2012, 『中國社會的個體化』上海譯文出版社.)
- 央視新聞, 2025, 「高考後現“医美”熱潮, 學生扎堆整形! 這些風險要注意→」央視網 (2025 年 7 月 28 日取得, <https://news.cctv.com/2025/07/05/ARTId62tIsYaRAhZWKA22Hy250705.shtml>).
- 宇文利, 2020, 「中國特色社會主義制度自信教育的基本定位與實踐要求」『思想理論教育』12: 17-22.
- 張紫萱, 2023, 「子ども教育期における新中間層の母親業——上海市と南京市の女性を対象として」『京都社會學年報』31: 103-25.
- 中國新聞網, 2022, 「每逢佳節被催婚 68.2%受訪未婚青年經歷過“催婚催戀”」中國新聞網 (2025 年 7 月 28 日取得, <https://www.chinanews.com.cn/sh/2022/02-10/9672602.shtml>).
- 周小李, 2008, 「社會性別視角下的教育傳統及其超越」華中師範大學 2008 年度博士論文.
- 周雪芳・張金丹, 2022, 「重審高等教育中的性別平等與差異——基於女性主義視角」『教育與考試』6: 78-84.
- Zhou, Yun, 2020, “‘Good Mothers Work’: How Maternal Employment Shapes Women’s Expectation of Work and Family in Contemporary Urban China,” *Journal of Social Issues*, 76(3): 659-80.

(教育學研究科 特定助教)

(受稿 2025 年 8 月 31 日、改稿 2025 年 11 月 17 日、受理 2025 年 12 月 18 日)

中国における新しい女性性をめぐる研究動向と展望

—少女から成人への移行に伴うジェンダー規範の変化という視点—

馮 可欣

本稿は世界中に広く見られるキャリア的な野心・性的魅力・母性を同時に体現する「新しい女性性」の理想に着目し、中国における新しい女性性の独自性を理解するために、少女から成人女性への移行に伴う女性性規範の変容という研究視座を提起する。本稿ではまず、新しい女性性に関する理論枠組みを提供した欧米の研究をレビューし、そこでは少女と成人女性は連続的なジェンダー秩序の中に取り込まれ、いずれも新しい女性性の期待に影響されていることを指摘した。続いて、中国の既存研究、特に少女から成人への移行に着目したエリート女性研究の最新の動向を紹介した。それらの研究に触発される形で、毛沢東時代から市場経済時代への移行の中で、少女から成人への移行を取り巻く女性性の規範を概観した上、中国の大きな社会変遷に刻印された少女から成人への移行における女性性の変化という、今日の新しい女性性研究を批判的に問い直す視点を提起する。

New Femininities in China: Research Trends and Future Directions through the Lens of Gender Norm Shifts from Girlhood to Adulthood

FENG Kexin

This paper focuses on the globally prevalent ideal of “new femininities,” characterized by the simultaneous embodiment of career ambition, sexual attractiveness, and motherhood. This study argues that in China, the shifts in gender norms during the transition from girlhood to adulthood provide an important perspective to understand the unique characteristics of such new femininities. Firstly, the paper reviews existing studies in Anglophone contexts that offered theoretical frameworks on new femininities, pointing out that both girlhood and womanhood are incorporated into a continuous gender order and are under the influence of new femininities. Following this, the article discusses recent research trends in China and analyzes the gender norms across the transition from the Maoist period to the market economy era. It illustrates that gender norm shifts in the transition from girlhood to adulthood in contemporary China result from continuities between today’s gender norms in education and those from the Maoist era, as well as from reconfigured gender expectations in the current market outside school. Through this analysis, the study shows that the imprint of historical transformations on individual life history is an indispensable lens towards understanding the uniqueness of new femininities in China.

キーワード：新しい女性性、新自由主義、移行

Keywords: New Feminine, Neoliberalism, Transition